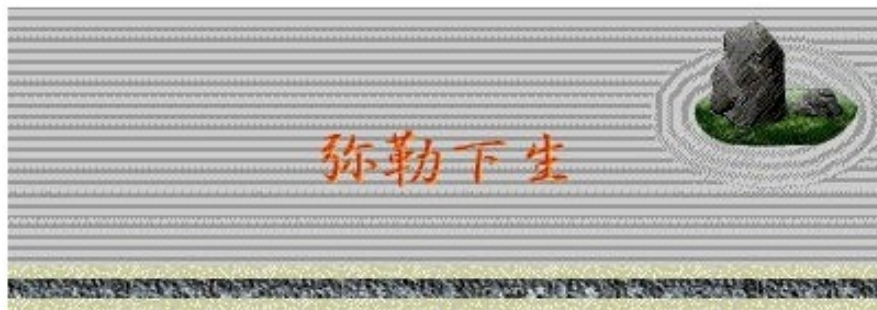


弥勒下生に 関わる話



yae-mon

はじめに

どんなことにおいてもそうだろうが、物事の理解とは、その理解の元になる予備知識がなくては始まらないのである。

ここで述べる「弥勒菩薩」についても、一度ならずも二度三度と、その名前をどこかしらで聞いて、ああこの名前は知っているぞ、となって、さらに詳しい由来などを聞けば、初めて興味して深く知識しようと思うのではないだろうか。

私もそのような流れで弥勒降臨、もしくは弥勒下生という話に興味したのではなかったか。特に私は、受動的に事が進んだ。

1995年に私は自費出版ながらも市販流通するタイプの本として、[「古代日本にカバラが来ていた」](#)という著書を少数だが、世に出した。それを購入して読まれた読者の中に、彩明日迦さんという方がおられて、「弥勒降臨」という著書を1997年に出された中に、拙著からの引用箇所がいくつか見られた。

それを読んだ名古屋の古い友人が、私の本が盗用されているから抗議したほうがいいと、知らせてくれて、そのことが元で、私は彼の著を購入し、いったいどういうことか調べてみれば、出典を明示しており、この程度なら許せる範囲ではないかと思い、友人のご指摘はありがたく頂戴しておくこととしたのだった。

その拙著からの引用箇所の部分に、おのずと私の意識は行くものである。そこには、かごめかごめのわらべ歌の謎解釈が載せられ、空海が弥勒菩薩の登場に深く関与することが書かれたりして、そのとき初めて弥勒降臨の態様について知ったのだった。

もし、彩明日迦氏の著書と巡り合わなかったら、弥勒の何たるやもわからず、どんな魅力のある弥勒話もパスしてしまったことだろう。

このように私には、事前知識がまずもたらされて、しばらくして、その知識していたことを予備知識として、謎解き問題に遭遇し、それを解読していくという経過を辿るのがおおかたの事案になっていることに気づくわけである。

今回ここに述べることは、弥勒に関する予備知識が元になり、2000年以降に遭遇した事案の解読に役に立ったという、ごくごく個人的な、他人にとってはどうでもいいような話になるに違いない。

これは奥人が直接、弥勒宣言した本人から聞いた話である。

2003年当時、私はUFOビデオ撮影友の会(発足1997年)に属していて、それまで会長の武良信行氏と二人で実践的にUFO撮影をしていたのだが、2003年になって初めて入会があった人物に、[坂本廣志氏](#)と奥さんの美紀恵さんがいた。

この坂本廣志氏は密教修行者で、しかも過去何度もUFO目撃だけでなく、宇宙人との遭遇をしているという人物で、宇宙人だけでなく、地球在住の龍神さんとも入魂で、インディーな不思議話に事欠かないのであった。

そうするうちに、彼自身が脚光を浴びるテレビ出演があり、[その取材ロケ前日に、満天の星のごときUFOの大群をビデオカメラに収めるといふ快挙をしてのけ](#)、UFO/宇宙人との交流話に一層の真実味が少なくとも我々の中では確定していたのであった。

当時の回顧録であるが・・・

当会の坂本さんはいよいよすごい人であることが分かってきた。

ある日、坂本さんは自宅の仏間で瞑想中、突然海が押し寄せてきて、家の中もすべて海中に沈んだという。

水は完全に部屋の中に充満しているにもかかわらず、普通どおりに息はできた。

と、そのとき胸の辺りにへばりついているものがある。

それは何と、仏教絵画に出てくる「龍魚」であった。

それが手を彼の胸につけて、何かをしている。

その手をどけて見ると、胸にぽっかりと空洞が空いており、そこから金色のまばゆい光がさしていた。

胸の皮一枚で、中の神々しい光の空間を包んでいるような感じなのである。

「ここで何をしている」と坂本さん。

龍魚は「お懐かしゅうございます。一万九千年前に突如おられなくなって、みんなで探し回っていたのですよ。こんなところにおられたとは。私はあなた様をずっとお慕い申し上げておりました。いま私の命をあなた様にお吹き込みしますから、どうか御本神をお顕わしてください。私はここで死ぬことができ本望です」と、またも手を彼の胸に置く。

その手を再び振り解いて、「待ちなさい。お前の命と引き換えにするわけにはいかない。私はここにいてすべきことがあるのだ」と諭す。

「あなた様は私たちの憧れの的だったのです。どうかこのような穢土におられず、私どもと共に

ただちにお帰りください」

「いや、私はここに最後まで救われずにいた者を救って帰りたいのだ」と押し問答になろうとする頃、「特別な時間は終わった」と大音声が響いて、龍魚は引き潮に引っ張られるようにして、「また引き離されるのは残念です。お元 気でお暮らしてください」と言葉を残して去っていった。

坂本さんは、そのようなことがあったにもかかわらず、自分がいったい何であったか、思い出せない。

以前にも、太陽の神に伴われていろいろ旅をしたが、その最後にまるで謎掛けのように、「御身の名は何と申す」と言って去った神がいた。

それが分かれば、自分のすべきことの全貌も分かるはずと思い、もしかすると分かるかも知れないと、謎解き第一の奥人に尋ねられた。

奥人は、いきなりのこととはいえ、すでに奥人の中で持っていた神話上の配役の名を口にした。

「黄泉津比良坂の坂本さんでしょう。そのココロは、古事記にも載っているように、イザナギの命が、黄泉の国からイザナミ・黄泉神連合軍に追われて逃げ出すとき、まずエビカツラ、次にタカム ナを投げて時間稼ぎして、いよいよ最後の土地の比良坂で坂本というところに生えていた桃の実を投げて、黄泉軍を撃退したとなっているわけですが、この意味 は” 空に満ちるほど丸い UFO がやってきて、殺戮地上軍を打ち破るというストーリーなんです。

[坂本さんはさる9月7日に実際に” 桃の実” が空に満ちるほどやってきたのを目撃し、撮影している](#)わけですね。つまり、実物の予行演習なんですよ。だから、本当の名前があるなら、おそらく坂本さんは、黄泉津比良坂の坂本さんではないかと思っています。

いや、もしかすると、桃の実を投げたイザナギの命のほうかも知れません」

「うーむ。そうかなあ」

奥人がさらりと言ってしまったので、そんなふうには言わざるを得ない坂本さんであったが、どこかまだ物足りないようだった。

奥人の言う黄泉津比良坂では、この後、イザナギの命と黄泉大神となったイザナミの命が、時空を隔ててしまう大きな岩を道の真ん中において、” 言戸” を言い渡し合う。

すなわち、イザナミの「私は今後一日あたり千人ずつ殺してやろう」と言うに対し、イザナギは「ならば私は、一日あたり千五百の産屋を建てよう」と、悪霊に捕り憑かれたイザナミに愛想を尽かし、永遠の離別を言い渡すのである。

これは間もなく起きる、聖書に言う最終戦争と、その後の成り行きを思わせる。

この選別の時を経て、穢土脱出の選民たちによる新しいエルサレム建設が始まるというわけだ。まさに、古事記と聖書は同じことを言っているようにも思う。

それはやがて間もなくやってくることであり、その引き金を引く国もすでに知れたことであるが、ここの読者ならすぐに分かることだ。

そのようなとき、奥人の周りに、「弥勒」というキーワードが出現し始めた。

奥人自身、弥勒菩薩というのは、あまり期待を持っていた神ではない。

というのは、奥人の著述「古代日本にカバラが来ていた」を引用転載している彩明日迦著の「弥勒降臨」では、釈迦滅後56億7千万年後に来て衆生を救うと いったふうな未到来の約束手形を持たされて望みを繋ぐタイプのドグマを引きずることへの揶揄が見られる。奥人もそう思うからであり、また光瀬龍の「百億の昼と千億の夜」の阿修羅王のファンでもあるからだ。

そして実際、奥人は協力者の登場により目覚めて、2000年9月から、邪神支配に対する行動を開始した。

大本神話にいう、国常立神の復活と復権という錦の御旗を立てての行動であったが、2002年8月にこの肝心の協力者の裏切りにあって頓挫してしまっ た。

これがうまくいってれば、すでに今頃、世界に夜明けの光がさしていたであろうと信じ切っているため、この裏切りへの恨みは根深いものがある。

そんなとき相前後するように現れた坂本さんであった。

9月この人の祝福を受けて西に帰る際、正面に神々しい神の目のような西日が見え、去り行く彼の家の方には、満環の大きな虹がかかり、さながら不思議な時空のゲートを潜る如き感があった。瑞兆であるに違いなかった。奥人は、そこから坂本さんの属する別の時空に入っているのだ。

ところが、2003年からなぜか”弥勒”という言葉があちこちから囁かれる。

奥人のサイトを訪問された愚民党さんが紹介を載せられた阿修羅サイトを見られたオリハルさんが、九つに仕切った奥人の創作サイトのトップページを見て、「弥勒十字」だと断言された。

奥人は、この創作サイトは、縁者を招くためのものと認識していた。

よって、弥勒が関係するなら、それも縁者ということになる。

また、国常立神は北東（丑寅）の方角に封印されているわけだが、弥勒菩薩も曼荼羅において大日如来の東北に配置されている将来仏である。

とすれば、救出を企てていた国常立神（ウシトラノコンシン）と弥勒菩薩は同体ではないのか。

そのような推敲を巡らせていたとき、坂本さんがもう一度奥人に、自分の名前は何だろうと聞かれた。

奥人が、やや畏まりながら「弥勒菩薩」と言うと、「そうや」と返事があった。

坂本さんも、UFOから強い光線を浴びせられるつど、封印された過去を思い出してくると言われていたが、ついにご自分の本神を悟られたようだった。

奥人は、坂本さんに出会った当初から、七福神の宝船に、七福神の神様一体ずつ背負って乗り組む、定められた人物を探している途上であると聞かされ、奥人は その船の水先案内を勤める役目だと聞かされていた。

なぜ初対面からそんな預言めいたことをと思うが、弥勒浄土にいざなう宝船というわけなのだろう。

坂本さんは、神に対して、今生の間に最低でも一万人救うことを約束していると言う。

それを大人口の中から選別して、浄土に連れて行かねばならぬと言う。

宇宙からきた正統な神々の遺伝子が、日本人にだけ伝えられていると坂本さんは言っていることなので、さしずめ日本人だけが対象となるであろう。

だが、奥人は、宇宙の一千億兆の有情の魂すべてを救わなかったらあかんと言って、叱咤激励している。が、それは大宇宙神である梵天の仕事かも知れない。

また、国常立神（ウシトラノコンシン）と同体なら、もっと正義感が強くてあってほしいが、まだまだだ。厳格な元の神の能力もいずれ開花されることだろう。

奥人は、あのときもしかすると、新神話は頓挫したのではなく、ちゃんと機能したのかもしれないと思った。

弥勒は草の根グループとして発展する集団であり、ウシトラノコンシンは、いま奥人の関わる最大の人物としていま傍にいる。

弥勒の記憶を取り戻しつつある人物が傍にいる。

彼は弥勒、666の人間である。不完全な人間の形をとらなければ、この壮大な役割は果たせないのである。

そのために、はるかトソツ天を突然辞して、この穢土にやってこられたのだ。

封印された丑寅の地を蹴って出られたのである。

彼は人と同じように悩みまた試行錯誤してこの時空に活着ている。

彼の意志の元、世界を夜明けに導くために、我々は自然に集った救世旅団である。

すぐ目の前まで来ている夜明けのために。

そして、とうとう、坂本さんにご自分の役割名だというものにまで言及された。

「ぼくの役割名は、イザナギノミコトやねん」

「えっ、そそ・それは・・・」

なんと、弥勒菩薩だけでなく、穢土脱出の魁となるイザナギさんまで……。ちょっと欲があり

すぎでは・・・汗。

当会の旧メンバー新メンバーで、そこまで切迫感を持っているのは、坂本さんと奥人ぐらいのものである。

武良さんは、いざのとき宇宙連合の助けがあるからか、地上のことに何ら切迫感はない。ただ一塊の伝令役のような機能でいて、最後には宇宙人が何とかしてくれると いった感じである。

また、ＹさんもＳさんも、神様お任せの境地にあるためか、先に起こる事にそのようなインスピレーションはない。

同胞ながら、彼らは救われる側の立場をしっかりと認識しているせいで、あわてないのだ。

その点、救う側の立場で奔走する坂本さんと奥人は、ノ一天気な彼らのわがままに付き合わされてたいへんである。

奥人はぼやく。

「水先案内の船頭も、船の中で乗組員があっち座ったりこっち座ったりのでんではらばらなら、舵を切れんと往生するで。こら責任負えんで」 と。

平成十五年十一月 奥人

空海の夢のお告げ・・・「まもなくお生まれになるぞ」

2008年(平成二十年)9月のお彼岸すぎに、弥勒下生の情報が、奥人最大のパートナーが高野詣でをした直後の夢の中で、空海ご自身からもたらされた。同時に不思議な六角オーブが、鶴亀すべるを象徴的に示す構図として、金剛峰寺持仏間を写した際の写真に撮られている。

これも当時のブログ上の回顧録から・・・

弥勒下生は間近だ!!

昨日(2008年9月24日)は身内さんが地元のバスツアーで高野山に行かれました。私は、彼女が出かけてから知ることとなり、あの地は結界がきつから一日心配なわけでしたが、案の定お蔭をもらって帰ってこられました。

私も鏡を見るように彼女と同様、昨晚から今朝にかけて、"気"が憔悴してしまい、ひどい体温低下とだるさに悩みました。しかし、お互いのコミがとれてからは情報の受け渡しができたために、気の疎通が図れて具合はいくぶん回復しています。

彼女の開口一番の情報は、高野山の話かと思えばさにあらず、昨晚見た夢の話でした。

彼女はすでに帰路のバスの中で強い睡魔に襲われていて、帰ってくるなり寝床で爆睡したといえます。

その際に見た夢がびっくりするような夢で、相撲の若貴兄弟のうちの若ノ花(兄のほう)の顔に似たお坊さんが、懐に白と金の光りもの(布にくるまっているような何か)を抱えて現れ、おごそかに「まもなくお生まれになるぞ」と言ったそうです。

私はその話を聞いて、咄嗟にその御坊とは空海・弘法大師であり、お生まれになるものとは弥勒菩薩であろうと直感しました。というのも、事前に知識していたのです。

身内さんは「若の花みたいな顔で、がっしりした体格の背が高くない人物だったから、ほんとに空海?」と言いましたが、ではと、空海の肖像画をネットで探してきて見せると、「似てる」と言います。

そのサイトは[ここ](#)。空海伝説にも詳しく、いいサイトを見つけたと思いました。

[「似てるという空海の肖像画」](#)

さらに彼女は、現地で写真を何枚か撮ったが、中に巨大なオーブが写っている一枚があるので鑑定してほしいと言います。

見ると、それは金剛峰寺の大広間と持仏間を写したもので、オーブは加納元信の描いた群鶴の心

すま絵の鶴一羽の頭上に現れていました。↓

一枚のふすま絵の上で、鶴亀が一堂に会し

ています ⇒ 鶴亀すべる



持仏間は、「本尊にお大師さまを奉安し、両側には歴代天皇御尊儀のお位牌や歴代座主のお位牌をおまつりしています。」とのこと。↓

http://www.koyasan.or.jp/kongobuji/about/jinai_01.html

持仏間の扉になる襖絵の手前にオーブはあるわけです。

しかも普通、オーブというと丸いたまゆらでしょう。ところがこの場合は六角形なのです。私も変形オーブは生霊の一例ぐらいしか撮ったことがありません。

しかし、六角とは。主体が強い想念であれば、着物の形も出るかもしれませんね。とすれば高僧の姿か？ それとも、六という数字を暗示しているのでしょうか。ならば六六六の弥勒ではなからうか。(3つの6、身六)

あるいは、六角オーブの中に髭の濃い人物の顔が認められないでしょうか。

私は不思議現象があれば、こだわって見ることにしています。さらに重要なメッセージがあるかもしれないからです。見つけたならば、推理の連環に加えて行きます。すると、それはおよそシンクロですから、連環の強化で築かれた魔法がいつそう強化することになるわけです。新神話という魔法は、少なくとも私の固有の世界で良好な働きをすることになるわけですね。

いつかきっとさんの交信メッセージも随時の状態把握に役立っていて、神話魔法の係り具合を確

認できます。"宮崎"というのも不思議なシンクロです。メイさんの随時の夢や経験談にも、はっと驚くことがあります。みなさんに感謝感激もいいところですよ。そのときのまとめものを次にしておりますので、ぜひご覧下さい。

「弥勒降臨・推測のプロセス」

さて、話を続けましょう。

釈迦の預言した弥勒が降臨する場所とは、この世でどこよりも繁栄している鶏頭城というところで、それは日本ではないかと噂されています。発音的に、京都とも東京ともとれそう。

いっぽう釈迦の弟子の摩訶迦葉は、弥勒の出現を待って、釈迦の養母の献じた金るの袈裟を手渡すためにその間、鶏足山で入定の状態で待機しているといえます。鳥の頭と足の呼応ですよ。これは紀元前の話。

いっぽう空海は、入滅に際して、未来において弥勒菩薩の下生に合わせて復活すると宣言しています。鶏頭城が日本ならば・・・こうして、摩訶迦葉は空海に比定され、鶏足山は高野山に比定されているわけなんです。

もしかしたら、身内さんの夢に現れた僧が抱えていたのは、弥勒に捧げる"金るの袈裟"だったのかも知れないし、あるいはすでにそれにくるまれた赤子の弥勒だったのかも知れませんね。

オーブも、空海自身か、もしくは生まれる弥勒のたまゆらだったのでしょうか。鶴＝トリ＝鶏の頭上に出ていることが、鶏頭城を示しているかのようです。鶏頭城の弥勒＝身六（霊身は六）を示したか。

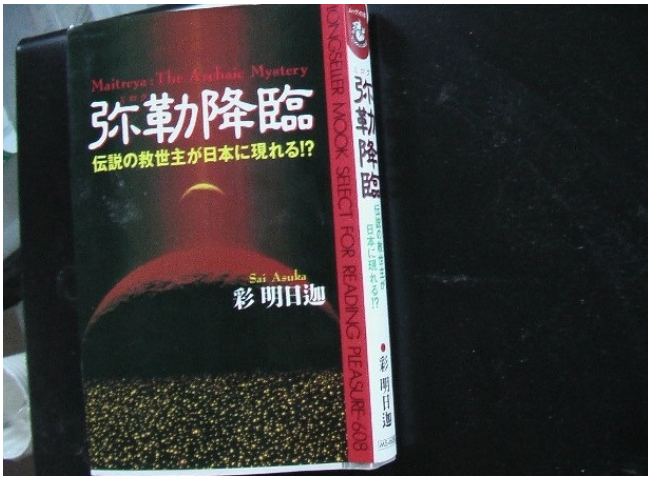
夢、写真のおかしな写り、偶然ではないメッセージ、こうしたものを通じて示される異界の出来事は、我々にとっては象徴として感得されるのが常です。とにかく、今この時期ゆえに、弥勒下生がいつ何時あってもおかしくないと思う次第です。

私はまだ憔悴感がすべてはぬぐえていません。たぶん彼女もそうでしょう。これを記事化して顕わし終えたとき、不調から解放されると信じ、取り組んでいるところです。早くしなくちゃ。しかし、弥勒降臨を伝えるのに、しんどいのはないんじゃない？

もうひとつ、過去にあったシンクロについて語っておきましょう。上の知識はそこから多く得ているからです。

私はHPに掲載中の「古代日本謎の中東思想渡来考」の原著を「古代日本にカバラが来ていた」題で1995年に出版しています。

ところが、それにいくぶん感化を受けた著者によって、「弥勒降臨」という著書が1997年に出されています。私の著書から多く引用されていて、名古屋の旧友から盗作されているみたいだから、抗議したほうがいいと指摘を受けて、一冊購入したようなことでした。



見れば、私が別図書で引用した程度のものであり、礼儀も守っているのでは何も文句つけることはないように思いましたが、文章表現をまるごと使っている箇所がいくらかあるのはどうなんでしょうね。

いや、それよりもこの著書の内容が私の1999年末以降の新神話形成に大きく関わってくるとは、思ってもみなかったことでした。特に拙著引用部分に切り込んでくる「かごめ歌」の解釈からは、大いに啓発され、人生がそのシナリオ展開に乗かってしまう格好にさえなったのでした。これも不思議なシンクロと言えます。

その他のいろんなところで、拙著の文章表現が散見されました。もしかして、彩明日迦＝北卓司（拙ペンネーム）をねらったのかな?? 申しておきますが、別人ですから。(^^;;

これを書き終えた時点で、体の不具合もほとんどなくなった。これまた不可思議。身内さんの具合もきっと良くなってることでしょう。

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

後でいろいろと調べてみれば、占星学的には2008年からみずがめ座に入ったと言います。それまでは、うお座の霊的抑圧時代だったというわけですね。彌勒はそれに合わせてご出現になるということのようです。

また、そのときはノー天気だったのですが、リーマンショックがあったのが2008年9月だったのです。つまり、彌勒は破壊相としてまず現れて、建て直しがその後にやってくるらしいことです。これからすると、特定の人物とするよりも、世の中の大きな流れと言ってもいいかも知れません。

弥勒下生に関わる話

<http://p.booklog.jp/book/97095>

著者 : yae-mon

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/yae-mon/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/97095>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/97095>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ